

日中経済交流研究会新聞 日中経済交流研究会 2024年8月例会

ありかも中国レーザー

～社運を賭けた設備投資は中国製？～

開催日：2024年8月6日（火）

参加者：●名

報告者：坂元鋼材(株) 代表取締役 坂元 正三



本社所在地：大阪府大阪市九条南3-28-4／設立：1952年12月27日／資本金：2,400万円／従業員数：●名
事業内容：ガス、プラズマ、レーザーによる鋼板の熔融加工／鋼板2次加工（穴あけ、曲げ加工など）／鉄鋼全般

来歴

坂元さんは大阪の九条生まれの55歳で、坂元鋼材株式会社の三代目の代表です。少年時代に小説家森村誠一さんの「悪魔の飽食」を読み、戦前の日中の歴史に関心を持ちました。その後、天安門事件から中国に対して興味を抱いて、1991年の大学生の時にハルビンまで旅行をしました。1993年には、中国の吉林大学に2年間留学するくらい、中国という国にはまりました。帰国して、時事通信社に入社後、お父様が営む坂元鋼材に入社し、1999年に代表に就任しました。

就任後の2005年には中国の特需で会社経営は潤いましたが、リーマン・ショックでは大赤字を経験し、その時に同友会とあきんど塾に入会しました。

中国へのかかわりで変わる自社

留学当時の中国製品の質は粗悪品と模倣品が多く、レジ袋の強度も弱くすぐに底が抜けて坂元さんは大変な目にありました。なぜ、中国製は粗悪品のイメージが付いたのでしょうか？それは、段ボール入り偽装肉まんやメタミドホス入り餃子が2007～2008年にかけてメディアで話題になったことが発端ではないかと推測されます。そして、そのような情勢の中国へ行く訪中に参加することになります。その当時、坂元さんはプレーヤーで自身が作業をしないと会社が回らないと感じており、6日間も会社をあけることは考えられなかったそうです。

しかし、先輩会員の言葉がきっかけで訪中に参加することになりました。「社員ができる仕事は社長がしたらあかん。社員に任せな成長せえへん。社長しかできない仕事をしないとイケない」。このことがきっかけで坂元鋼材は家業から企業へと変わることができたそうです。

2014年、中国は経済大国になっており、高速鉄道も整備されていました。大学生に行った時の経路は高速鉄道のおかげで所要時間が短縮されていて、街並みもガラッと変わっていました。中国は非常に豊かになっており、逆に日本はすでに豊とはいえないのではないかと感じたそうです。

トルンプにするか、HSGにするか

坂元鋼材では2009年にレーザー加工機の一流メーカーであるドイツのトルンプ社の機械を導入しました。現在でも大活躍の機械です。

仕事の効率をよりよくするために2023年にもう1台導入の計画が出ました。そこで候補としてあがったのが中国のメーカーのHSGでした。このメーカーは、稲盛哲学や松下の研究など日本流の経営思想を積極的に取り入れ、技術力も中国ではトップクラスのメーカーです。導入している中国の企業に見学に行くと、集じん機もついていない非常に環境の悪い中で稼働していました。日本国内では考えられないことです。中国では、機械は消耗品として考えられており、3年くらいで買い替える流れで、それくらい儲かっていそうそう。そして、中国ではレーザー業界が巨大で、成長スピードも非常に速いため、3年前の機械ではすでに旧型になってしまうそうです。また、HSGは日本国内で有名女優を起用したCMも流しており、中国製品の偏見を変えさせるための工夫をしています。

そして、ついに坂元さんは購入の決断をしました。選んだのは、なんと…トルンプの機械でした。中国製は数年で買い替える国民性のために耐久性に疑問が残ったこと、トルンプ製は自社で15年の実績があり現在でも稼働していること、日本市場で20年以上の実績があること、そして省エネ補助金の対応機種だったことから、中国のHSG製を断念することにしました。

しかし、現在の中国の品質は向上しており、坂元さんは、次の機械導入時にはぜひHSGの機械を使いたいと考えています。

感想

坂元さんの報告から、中国製の「安かろう・悪かろう」の偏見が国内で強く根付いていたのだと感じました。しかし、現実には品質も日本に負けないものを作っています。何事も、常に最新の正確な情報にアップデートをし続けて決断することが経営者として大切だと、改めて報告を聞いて感じました。

文：日中経済交流研究会 広報委員会
(株)北村製作所 北村 裕嗣